

第二期HIRAKU-Global 教員

渡航先：アメリカ
研究機関：ミシガン州立大学
期間：2023年5月25日～9月11日

広島大学 学術院 / 大学院医系科学研究科
助教

2019年、米国スクリプス研究所の博士研究員、2020年、広島大学医系科学研究科の助教に着任。ゲノム編集の技術開発に携わる傍ら、「人工オルガネラ」という全く新しい視点の研究テーマに挑戦。細胞内に遺伝子情報を送り込むことによる新たな治療ツールの実現や、細胞内共生 (ESS) の研究に取り組んでいる。

松本大亮

MATSUMOTO Daisuke

04

競合よりも協働へ。刺激に満ちた共同研究。

尊重し合う風土でイノベーションを

約3カ月の間、米国・ミシガン州立大学で共同研究を行ってきた松本先生。同大学を選んだ経緯は次のとおりだ。

「共同研究のパートナー Christopher Contag 教授とは、ある論文を機に関わりを持つようになりました。その論文は枯草菌を細胞内に共生させ、物質導入を行い、マクロファージ細胞の機能を制御するというものでした。自分の研究内容と似ていたため連絡を取り、共同研究を申し出たところ、快諾してくださいました」

しかし Contag 教授の論文を見つけた当初は、「同じ研究テーマで本当に一緒にやってくれるのだろうか」と不安がよぎったそう。そこで HIRAKU-Global メンターの登田先生に相

談すると、「競合するよりは、協働すべきだ」と背中を押され、共同研究を決心したという。

実際に現地に行ってみると、教授のラボがある研究センターは、フロアごとに異なる分野の研究ラボがあり、所内では分野を超えての共同研究も行われていた。そうした研究環境について先生は次のように話す。

「アメリカは、研究者を温かく迎える環境が整っています。研究者同士の関係性もフラット



Christopher Contag 教授と

The Institute for Quantitative Health Science & Engineering (IQ)



で、お互いを尊重し合う風土があるので、会話も弾みます。意見交換するときも、まずは面白くなって「聞く姿勢」を示してくれます。もちろん聞くだけでなく、アイデアを提供してくれることもあります。やはりこういう環境から、イノベーションは生まれるものなんだと感銘を受けました」

世界に必ずいる、同じアイデアを持つ人

今回の渡航全体を通じて、「海外に出ると、自分と同じアイデアを持つ人が必ずいると気付きます」と話す松本先生。かつては知識や論理的な構成不足もあり、自身のアイデアについて「まるでSFだね」と言われたこともあったそう。だが米国で同じような考えを持つ仲間に出会い、とても励みになったという。

「日本と違って、米国には挑戦することをよしとする文化があります。もしも日本で研究に行き詰まりを感じているなら、一度異なる環境に身を置くことをお勧めします。新しい視点が変わり、自分なりの研究が見えてくるかもしれません」

実は今回、とある博士課程の学生に出会うことへ感謝しているという。獣医学部に籍を置くその学生はとても優秀で、全く異なるバックグラウンドの細胞内共生 (ESS) 研究を遂行しながら、先生にたくさんのアイデアを示してくれた。そんな彼との研究がとても楽しく、多くの刺激をもらったそうだ。

今後は共同研究者たちと共に、ESSの実現に向けたコンソーシアムを立ち上げ、日本支部のような形で、一緒に研究していく仲間を増やしたいと考えている。

「もちろん広島大学にも、研究への情熱と豊富なアイデアを持つ学生はたくさんいるはずなので、その才能をいち早く見つけ、仲間になってもらえるように、自分自身の講義の質も向上させたいです」

最後に、これから研究者を志す人へ「助けてくれる人は必ずいるから、チャレンジを諦めないでほしい」とメッセージを送ってくれた。